



Title	関西周辺部における言語接触の一斑：語法に関するグロットグラムから
Author(s)	真田, 信治
Citation	阪大日本語研究. 1989, 1, p. 15-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4550
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関西周辺部における言語接触の一斑

— 語法に関するグロットグラムから —

The Language Contact in the Kansai Dialect

— From the Viewpoint of the Grottoqram —

真 田 信 治

キーワード：関西方言 言語接触 言語変化 一段動詞の五段活用化 グロットグラム

0

本稿は、関西における中央部方言と周辺部方言との対立、接触の一斑について考察を加えるものである。なお、分析の対象項目は語法に関するものである。

フィールドは、紀伊半島である。具体的には国道168号線沿いの、和歌山県^{シノヅウ}新宮市^{オオジ}王子町から奈良県^{ゴセ}御所市^{ムロ}室までの間、26地点(A～Z)である(図1参照)。直線距離にしておよそ90kmある。調査は南の新宮市側から、熊野川町、本宮町(以上、和歌山県)、十津川村、大塔村、西吉野村、五条市、そして御所市(以上、奈良県)へと北上する形で実施した。調査期間は1986年7月25～29日、および1987年3月7～8日である。調査者は、大阪大学大学院における真田の社会言語学演習に参加しているメンバーが中心となった。

インフォーマントは、これら26地点で、この地点生え抜きの人を4つの年層(若年10～29歳・壮年30～49歳・実年50～69歳・高年70歳～)から各1名ずつを選んだ。性別は問わなかった。対象者は合計すると104名にな

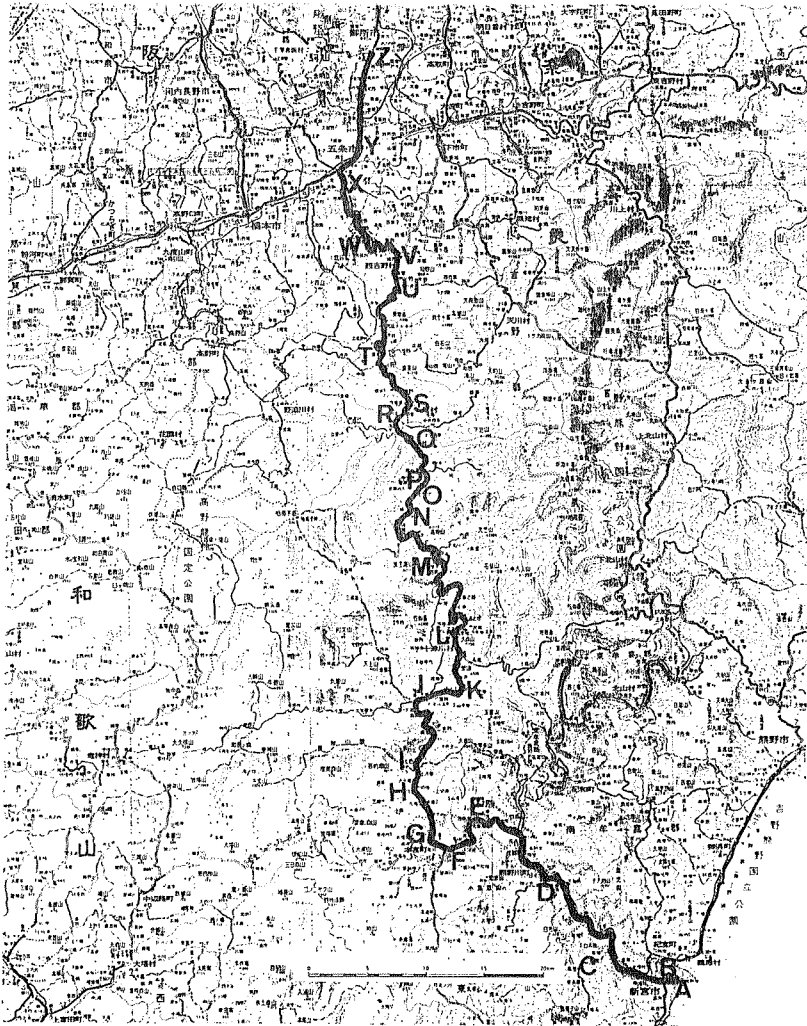


図1 調査地域

る。このような選定をしたのは、調査結果をグロットグラム（地点×年層図）の形でまとめることをめざしたからである。

なお、データの整理は、荻野綱男氏開発の GLAPS を利用して、田原広史氏の協力のもとに、大阪大学大型計算機センターにおいて行なった。

1

図2は、五段活用の動詞「行く」の打消形「行かない」の「行か」の部分のグロットグラムである。そして、図3は「ない」の部分のグロットグラムである。

まず、図2から見よう。全域に IKA の形が分布しているが、北部に IKE の形が現われ、南下の傾向を示している。南部での壮年層と若年層にも若干顔を出している。(なお記号が2つあるものは、併用を表わす。左から回答順。)

+-----+				+-----+						
10-	30-	50-	70-	10-	30-	50-	70-	AGE		
NO OF CASES = 104				NO OF CASES = 104						
I	-	-	-	-	I	Z	I	* # # * I Z	ムロ_____コセ_____	
I	。	。	。	/	I	Y	I	* * * / I Y	入エ コシヨウ	
I	。	。	。	。	I	X	I	* =* * * I X	ノハラ_____	
I	-	。	。	。	I	W	I	* * =* * I W	ワタ	
I	。	。	。	。	I	V	I	* * * =* I V	シヨウト ニヨシノ	
I	-	。	-	-	I	U	I	= * = = I U	タテカワト_____	
I	-	。	。	-	I	T	I	= * =* = I T	サカモト	
I	-	-	-	-	I	S	I	=* = = = I S	ツシトウ オオトウ	
I	-	-	-	-	I	R	I	= = * = I R	ウイ_____	
I	-	-	-	-	I	Q	I	/ = / = I Q	ナカトノ	
I	-	-	-	-	I	P	I	* = = = I P	タセ ト	
I	-	-	-	-	I	O	I	= = / = = I O	ウエノシ	
I	-	-	-	-	I	N	I	= = = = I N	タコツ ツ	
I	-	-	-	-	I	M	I	= = = = / I M	カサヤ	
I	-	-	-	-	I	L	I	= = = = I L	オハラ カ	
I	-	-	-	-	I	K	I	= = = = I K	オリタチ	
I	-	-	-	-	I	J	I	= = = = I J	ヒラタニ ワ	
I	-	-	-	-	I	I	I	= = = = I I	ナサイロ_____	
I	-	-	-	*	-	I	H	I	= = = # = I H	ハキ
I	-	-	-	-	I	G	I	= = = # = I G	ウエチ ホンクウ	
I	-	-	-	-	I	F	I	= = = = I F	ウケカワ_____	
I	-	-	-	*	-	I	E	I	= = = = / % I E	ニシキヤ クマノカウ
I	。	-	-	-	I	D	I	* % = = I D	ノキ_____	
I	-	-	-	-	I	C	I	= = = / = = I C	タカタ	
I	-	。	-	-	I	B	I	=* * = = I B	カミホンマチ シンクウ	
I	-	-	-	-	I	A	I	= = / / = = I A	オオシマチ	
+-----+				+-----+						
-	(91)	IKA	/	(8)	NAI			
。	(21)	IKE	=	(80)	N			
*	(2)	IKYA	*	(26)	HEN			
=	(2)	YUKA	#	(4)	HIN			
/	(1)	IKI	%	(3)	SEN			
				/	(1)	OTHERS			

図2 「行かない」

図3 「行かない」

図3とあわせて見ると、このIKEは必ずHENと結びついたIKEHENという形であることがわかる。一方、IKAはHENと結びつく場合もあるが、大部分はNと結びついたIKANという形であることがわかる。

ところで、IKEHENは、関西中央部の、大阪における使用形である。IKEHENは関西中央部のプレステージを背景として、北部からしだいに侵入してきたものと推定される。現在、IKANとIKEHENは大塔村(R~T)あたりを緩衝として対峙しているわけである。なお、標準語形IKANAIは散在するものにすぎない。

図3によれば、~HINの形が、御所市(Z)と、併用で本宮町の2地点(G・H)に見える。また、地点EとHでの高年層における~SENはIKYASENという形であり、いずれもIKANと併用されているものである。強調形「行きはせん」に対応する形と考えられる。

2

図4および図5は、「行く」の可能の打消形「行けない(行くことができない)」のグロットグラムである。ここでも、「行け」の部分(図4)と「ない」の部分(図5)を分けて掲げたが、考察は両図を総合して当てることにする。

全域的に可能動詞形IKENが分布している。そして、北方からIKAREHENの侵入が認められる。IKAREHENは、年層が低くなるにつれて拡大している。IKAREHENは、大阪で、単なる打消形がIKAHENからIKEHENへと変化して、可能の打消形IKEHENと同音衝突をおこした結果、活用されるようになった形式である(真田, 1989)。この地では、その形式が新形として借用され始めているのである。そしてその勢いは、上に見た単なる打消形のIKEHENの取り入れよりも急激なようである。

年層の低いところに散見するIKERENは、可能動詞形にさらに可能の助動詞が付加して生まれた新形である。

なお、北中部にYOOIKANの形が点在しているが、この形式は、いわゆる能力可能に限定して用いられるものと判断されるので、ここでは一応

+				+				+						
I	∅	"	&	-	I	Z	I	*	#	#I	*	I	Z	ムロ_____コ"セ_____
I	I∅	∅	∅	-	I	Y	I	*	*	/*	ノ	I	Y	入エ_____コ"シ"ヨウ
I	∅I	∅%-	∅	∅	I	X	I	*	*=	*	*	I	X	ノハラ_____
I	∅	∅	%	∅	I	W	I	*	*	=	*	I	W	ワタ"_____
I	∅	∅	∅	∅	I	V	I	*	*	*	*=	I	V	シ"ヨウト"_____ニシヨシノ
I	-∅	∅	∅	%	I	U	I	=*	*	*	=	I	U	タチカウト_____
I	∅	I∅	∅	%	I	T	I	*	*	=*	=	I	T	サカモト_____
I	∅	-	-	-	I	S	I	*	*	=	/=	I	S	ツシ"ト"ウ_____オオトウ
I	∅=-	∅	-	-	I	R	I	*=	*	=	=	I	R	ウイ_____
I	∅	-	-∅	%	I	Q	I	/	=	*	=	I	Q	ナカ"トノ_____
I	∅	∅=	-	-	I	P	I	*	=	=	=	I	P	タニセ_____ト
I	-	-	∅	-	I	O	I	=	=	=	=	I	O	ウエノシ"_____
I	-	-∅	-	-	I	N	I	=	=	=	=	I	N	タコツ_____ツ
I	-	-	∅	∅	I	M	I	=*	*	=	=	I	M	カサ"ヤ_____
I	-	-∅	-	-	I	L	I	=	=	=	=	I	L	オハ"ラ_____カ
I	-	-	-	-	I	K	I	=	=	=	=	I	K	オリタチ_____
I	-	∅I-	-/	-	I	J	I	=	=	=	=	I	J	ヒラタニ_____ワ
I	-	-	-	-	I	I	I	=	=	=	=	I	I	ナナイロ_____
I	-	I	-	-	I	H	I	=	=	=	=	I	H	ハキ"_____
I	∅	-	-	∅I	I	G	I	=	=	=	*=	I	G	ウエチ_____ホンク"ウ
I	-	-	-	-∅	I	F	I	=	=	=	=	I	F	ウケカ"ワ_____
I	-	-	-	-	I	E	I	=	Y	=	=	I	E	ニシシキヤ_____クマノカ"ウ
I	-∅	/	-	-	I	D	I	=*	%*	=	=	I	D	ノキ_____
I	-	-	-	-	I	C	I	=	=	Y=	=	I	C	タカタ"_____
I	I∅	I-∅	-	-	I	B	I	=*	=	=	=	I	B	カミホンマチ_____シング"ウ
I	I	-	-	-	I	A	I	=	=	=	=	I	A	オオシ"マチ_____
+				+				+						
10- 30- 50- 70-				10- 30- 50- 70-				AGE						
NO OF CASES = 104				NO OF CASES = 104										
-	(65)	IKE	/	(3)	NAI							
∅	(40)	IKARE	=	(73)	N							
=	(2)	IKERA	*	(33)	HEN							
I	(9)	IKERE	#	(2)	HIN							
%	(5)	YOOIKA	%	(1)	SEN							
&	(1)	IKEYA	Y	(2)	YAN							
/	(2)	IKA	I	(1)	IN							
"	(1)	IKAREYA	ノ	(1)	OTHERS							

図4 「行けない」

図5 「行けない」

考察の圏外におくべきであろう。

3

図6は、「行く」の打消過去形「行けなかった」の「行けな」の部分、そして図7は、「なかった」の部分のグロットグラムである。

図6における状況は、先の図2での状況とほぼ対応しているので、説明を省略する。図6と図7とをあわせて検討すると、各種の形式が錯綜してはいるが、年層の高いところでは、ほぼ南部 IKANANDA、北部 IKA-

+-----+				+-----+												
I	-	㊦	-	I	Z	I	#H	D	D	H	I	Z	ムロ	_____	コセ	_____
I	㊦	㊦	㊦	I	Y	I	H	H	N	=	㊦	I	Y	スエ	_____	コシヨウ
I	㊦	㊦	㊦	I	X	I	NH	HN	%	N	N	I	X	ノハラ	_____	_____
I	-	㊦	㊦	I	W	I	N	HN	N	H	I	W	ワタ	_____	_____	_____
I	㊦	㊦	㊦	I	V	I	N	NH	㊦NH	N	I	V	シウウト	_____	ニシヨシノ	
I	-	-	㊦	I	U	I	N	N	㊦N	%	㊦#	I	U	タテカワ	_____	_____
I	-	㊦	-	I	T	I	%	NH	NH	%	I	T	サカモト	_____	_____	_____
I	-	-	-	I	S	I	#	%	㊦	㊦	=	I	S	ツシ	_____	オオトウ
I	-	-	-	I	R	I	#	H	A	%	I	R	ウイ	_____	_____	_____
I	-	-	-	I	Q	I	=	#	#	㊦	I	Q	ナカ	_____	_____	_____
I	-	-	-	I	P	I	N	㊦	㊦	㊦	I	P	タニセ	_____	_____	ト
I	-	-	-	I	O	I	#	㊦	㊦	㊦	=	I	O	ウエノシ	_____	_____
I	-	-	-	I	N	I	#	㊦	㊦	㊦	=	I	N	タコツ	_____	ツ
I	-	-	-	I	M	I	#	㊦	㊦	㊦	㊦	I	M	カサヤ	_____	_____
I	-	-	-	I	L	I	#	㊦#	㊦	㊦	㊦	I	L	オハラ	_____	カ
I	-	-	-	I	K	I	#	㊦	㊦	㊦	㊦	I	K	オリタチ	_____	_____
I	-	-	-	I	J	I	#	㊦	㊦	㊦	㊦	I	J	ヒラタニ	_____	ワ
I	-	-	-	I	I	I	#	㊦	㊦	㊦	㊦	I	I	ナナイロ	_____	_____
I	-	-	-	I	H	I	#	㊦	㊦	㊦	㊦	I	H	ハキ	_____	_____
I	-	-	-	I	G	I	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	I	G	ウエチ	_____	ホンク
I	-	-	㊦	I	F	I	㊦	㊦#	㊦	㊦	=	I	F	ウケカ	_____	_____
I	-	-	-	I	E	I	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	I	E	ニシキヤ	_____	クマノカ
I	-	-	-	I	D	I	#	㊦	㊦	㊦	㊦	I	D	ノキ	_____	_____
I	-	-	-	I	C	I	㊦	R	㊦=#	㊦	㊦	I	C	タカタ	_____	_____
I	-	-	-	I	B	I	#	R	㊦	㊦	㊦	I	B	カミホ	_____	マチ シンク
I	-	㊦	-	I	A	I	㊦	㊦#H	㊦	㊦	㊦	I	A	オオシ	_____	マチ

10- 30- 50- 70-
NO OF CASES = 104

- (89) IKA
㊦ (20) IKE

10- 30- 50- 70- AGE
NO OF CASES = 104

= (6) NAKATTA
㊦ (58) NANDA
(21) NKATTA
% (7) NDA
H (14) HENKATTA
N (18) HENDA
A (1) HENANDA
D (2) HINDA
R (2) RANDA

図6 「行かなかった」

図7 「行かなかった」

NDA ないし IKEHENDA の対立とみなされる。その緩衝はやはり大塔村(R~T)である。南部, 新宮町の一部(B・C)に IKARANDA が見られるが, これは IKANANDA の変形である。また, 北部, 御所市(Z)には IKAHINDA が見られる。

北部では, IKEHENDA のなかに IKEHENKATTA という形も強くくいこんでいる。IKEHENKATTA は, 現代の大阪における使用形である(真田, 1987)。南部において, 特に若年層で IKANKATTA が現わ

れているが、これは北部の IKEHENKATTA に対応させた新形である。いずれにしても、~KATTA という形は、当地においても新しい勢いをもって広がりつつあることが認められるのである。

4

図8は、カ行変格活用動詞「来る」の打消形「来ない」の「来」の部分のグロットグラムである。そして図9は、「ない」の部分のグロットグラムである。

まず、図8から見よう。高年層ではほぼ全域的に KO の形が分布してい

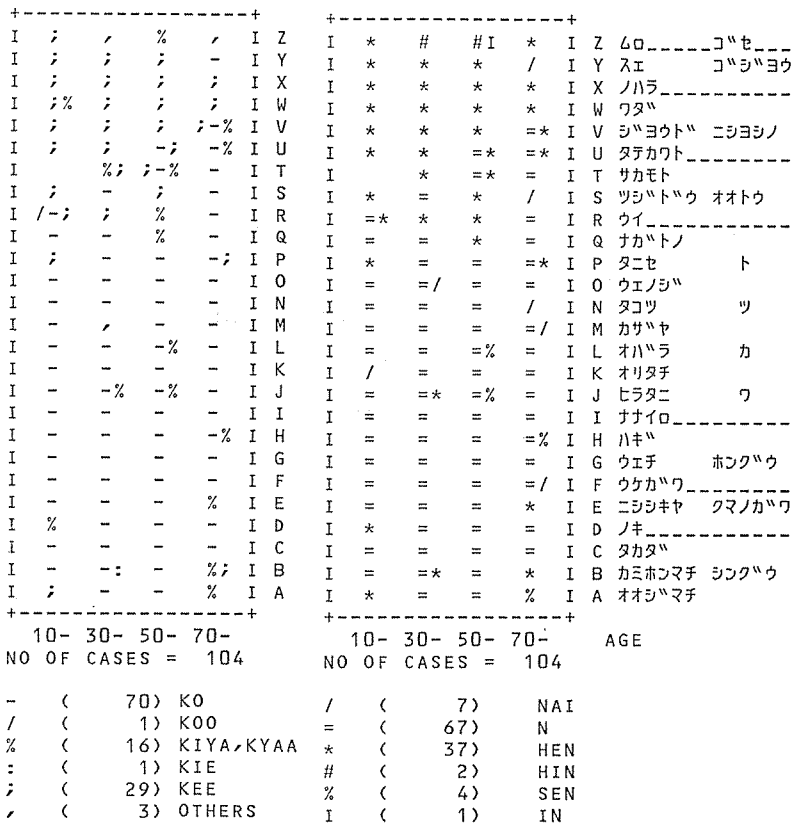


図8 「来ない」

図9 「来ない」

るが、実年層以下になると、北部に KEE が出現してくる。KEE は、若年層においては十津川村の北部（P）にまで南下してきている。

図9とあわせて見ると、KEE は必ず HEN と結びついた KEEHEN という形であることがわかる。一方、KO はNと結びついた KON という形である。KEEHEN は、大阪における使用形である。関西中央部のプレステージを背景に、しだいに KON の領域を侵しているというわけである。標準語形 KONAI は散在するものにすぎない。

なお、KIYASEN、KIYAHEN の形が多く併用形として散見する。これは「来はせん」に対応する強調の形と考えられる。

～HIN、～IN の形は、北部、御所市（Z）にのみ出現するものである。

5

図10および図11は、「来る」の可能の打消形「来られない（来ることができない）」のグロットグラムである。

両図を総合して見ると、大部分の地点に KOREN が分布していることがわかる。この地において、可能動詞形が一般化した時代のあったことが知られるのである。北部に現われている KORAREHEN は、先の「行けない」の場合でも見たように、この地域において、関西中央部から新たに借用されはじめた形を認められる。KOREN と KORAREHEN の併用者は、内省において、多く KORAREHEN の方を新しい形と報告していることも付け加えておきたい。

五条市の一部（X）における KIYAREHEN についてはその由来がわからない。なお、YOOKON など、先の「行けない」の場合と同様 YOO～の形が点在しているが、これはいわゆる能力可能を特定して表現する形式と考える。

6

図12は、一段活用動詞「見る」の打消形「見ない」の「見」の部分のグロットグラムである。そして、図13は「ない」の部分のグロットグラムで

+-----+				+-----+						
	10-	30-	50-	70-		10-	30-	50-	70-	AGE
	NO OF CASES = 104					NO OF CASES = 104				
I	/=	ノ	Z	=/	I	Z	ムロ	コセ		
I	/=	=	=	=	I	Y	スエ	コシヨウ		
I	=	W=	&	&	I	X	ノハラ			
I	=	=	YK	=	I	W	ウタ			
I	=	=	=	=	I	V	シヨウト	ニヨヨシノ		
I	=	=	/=	W	I	U	タテカワト			
I	/	/	/=	=	I	T	サカモト			
I	=	/W	/=	=	I	S	ツシット	ウ オオトウ		
I	* /	=	/	/	I	R	ウイ			
I	/	/	/	/	I	Q	ナカトノ			
I	/=	/	/	/	I	P	タニセ	ト		
I	/	/	/	/	I	O	ウエノシ			
I	/	/	/	/	I	N	タコツ	ツ		
I	/	/	/	*	I	M	カザヤ			
I	/	/	= /	/	I	L	オハラ	カ		
I	/	/	/	/	I	K	オリタチ			
I	/	/	W	/	I	J	ヒラタ	ワ		
I	/	/	/	/	I	I	ナナイロ			
I	/	#W	/	/	I	H	ハキ			
I	/	/	/	@=	I	G	ウエチ	ホンクウ		
I	/%	/	/	/	I	F	ウケカ	ワ		
I	/	/	/	/	I	E	ニシキヤ	クマノカ	ワ	
I	/=	/	/	/	I	D	ノキ			
I	/	/	/	/	I	C	タカタ			
I	/	/=	/	/	I	B	カミホニマチ	シングウ		
I	/	/	%	/	I	A	オオシマチ			

図10 「来られない」

図11 「来られない」

ある。

まず、図12から見よう。さまざまな形式が現われているが、MI の形が高年齢層に偏って広い領域を占める。関西中央部での形 MII は散在するものにすぎない。ところで、全域的に MIYA という形が分布している。図13とあわせて見ると、この MIYA は MIYASEN ないし MIYAHEN の形であることがわかる。本来、強調形であったものがニュートラルなも

I	@/	@	@	"@	I	Z
I	●	●	●	●	I	Y
I	●@/	●	●	●	I	X
I	●●	●●	!	"/	I	W
I	●●	●●	●/	/@-	I	V
I	●	@	●	@	I	U
I	/	&	&	&	I	T
I	&	-	"	-&	I	S
I	&	/&@	@	-	I	R
I	&	&	@	-	I	Q
I	/	&	-	-	I	P
I	&	&@	-	-	I	O
I	&	&	&	-&	I	N
I	&	&	&	-	I	M
I	&	/-&	@	-	I	L
I	-	@	@	-	I	K
I	&	&@	@	-	I	J
I	&	&	&	-	I	I
I	-@	@-	@	-	I	H
I	@	-	@	-	I	G
I	@	-@	@&	-	I	F
I	-	-	@	-	I	E
I	-	@	@	-	I	D
I	@	@	@&	@	I	C
I	@/	"/	@	@	I	B
I	@	"	@	@	I	A

10- 30- 50- 70-
NO OF CASES = 104

-	(31)	MI
/	(10)	MI
@	(37)	MIYA
&	(32)	MIRA
●	(15)	MIRE
"	(5)	MIE
!	(1)	MEE
/	(1)	OTHERS

図12 「見ない」

I	*#	#	#	*	I	Z
I	*	*	*	/	I	Y
I	*#	*	*	*	I	X
I	*	=*	*	*	I	W
I	*=	*=	*#	*=/	I	V
I	*	*	*	*	I	U
I	#	*	*	*	I	T
I	=	=	*	/=	I	S
I	=	=*	*	=	I	R
I	=	=	*	=	I	Q
I	#	=	=	=	I	P
I	=	=*	/	=	I	O
I	=	=	=	/=	I	N
I	=	=	=	/=	I	M
I	=	=	%	=	I	L
I	=	%	=	=	I	K
I	=	=*	%	=	I	J
I	=	=	=	=	I	I
I	=	=	=	=	I	H
I	=	=	=	=	I	G
I	*	=*	=	=/	I	F
I	=	=	%	=/	I	E
I	=	=*	%	=	I	D
I	=	=	=%	=	I	C
I	*	*	=%	=	I	B
I	*	*	=	%	I	A

10- 30- 50- 70-
NO OF CASES = 104

/	(8)	NAI
*	(68)	N
=	(35)	HEN
#	(7)	HIN
%	(9)	SEN

図13 「見ない」

のに転化したのであろう。MIYAHEN は、逆行同化をおこして、一部で

*MIYEHEN>MIEHEN>MEEHEN

と変化した(渋谷, 1986)。そして、一方で、

MIIHEN>MIHIN

とも変化した。ちなみに MIIHIN は関西中部、京都における使用形でもある。

なお、MIYAHEN の HEN にNが干渉した MIYAN の形も一部で生まれている。

さて、図12によれば、中部域の十津川村(I~Q)とその周辺には MIRA がめだっている。これは、「見る」を五段に活用させた、その未然形である(金沢, 1988)。この形は年層が低くなるにつれて増えている。すなわち、勢力を拡大していることが認められる。図13とあわせて見ると、この MIRA は MIRAN という形であることがわかる。

ところで、注目したいのは、北部域の西吉野村~五条市間(U~Y)に存在する MIREHEN という形式である。この形式は主として実年層以下に見られるので、新しいものと考えられる。そこで、この形式の発生のメカニズムについて分析してみることにする。

まず、先の図2・3と対照して見ていただきたい。図2・3は、五段動詞の打消形「行かない」に対応する形式の分布状況であったが、そこでは、南部: IKAN, 北部: IKEHEN の対立が存在し、北部の IKEHEN は、借用による新しいものと推定された。すなわち、北部では、IKAN → IKEHEN の変遷が認められたのである。(そして、これは、五段動詞一般の流れでもある)。したがって、この流れは、当地(北部域)の人々にとって、五段活用動詞と分類されている「見る」についてもそのままにあてはめられることになった。表示すれば、次のようである。

	南 部		北 部
「行かない」	IKAN	→	IKEHEN
	(五段化)		(類推)
	↓		↓
「見ない」	MIRAN	→	MIREHEN

すなわち、MIREHEN は、類推によって新しく生まれたものと考えられるのである。

7

最後に、一段活用動詞の五段活用化という点をめぐって、その状況を述べよう。上に「見る」という語について、未然形の現われ方を軸に、その実態の一斑を見たが、ここでは、「見る」に、さらに、「起きる」という

I	0	OR	/I	/	I	Z	ムロ	コセ
I	0	*	(+	I	Y	スエ	コシヨウ
I	0	0	0	+	I	X	ノハラ	
I	0	0	0	\$	I	W	ウタ	
I	*	*	*	0	I	V	シヨウト	ニシヨシノ
I	%	/0*	0	0!	I	U	タチカウト	
I	*	0	+	0	I	T	サカモト	
I	*0	*	;	0	I	S	ツシトウ	オオトウ
I	*	0	Q	*	I	R	ウイ	
I	0-	0*	*-	0	I	Q	ナカトノ	
I	*	0	0	00	I	P	タニセ	ト
I	0	+	*	0	I	O	ウエノシ	
I	*	0	0	/	I	N	タコツ	ツ
I	*	*	/	0	I	M	カサヤ	
I	*	0*	0	0	I	L	オハラ	カ
I	*	0+	0	00	I	K	オリタチ	
I	*	+0	0/	0	I	J	ヒラタニ	ワ
I	*	0	0	0	I	I	ナナイロ	
I	0	0	0	0	I	H	ハキ	
I	0	0	0	/	I	G	ウエチ	ホンクウ
I	0/	0	0	/	I	F	ウケカワ	
I	0	0)	0/	I	E	ニシキヤ	クモノカワ
I	/	/	0/	/	I	D	ノキ	
I	:ミ	/	/	/!	I	C	タカタ	
I	'	(/	/	I	B	カミホンマチ	シンクウ
I	~	"	/	!	I	A	オオシマチ	

10- 30- 50- 70- AGE
NO OF CASES = 104

-	(2)	MIRO	;	(1)	MIE
ニ	(1)	MIRORAA	:	(1)	MI
*	(22)	MIRE	((3)	MITEMI
+	(6)	MIREYO)	(1)	MITEMII
%	(1)	MIREEYO	\$	(1)	MINKA
0	(2)	MIRI		(1)	MIYANKA
0	(2)	MIRIYO	/	(2)	MINASAI
0	(39)	MII	'	(1)	MINAAREYO
0	(17)	MIIYO	"	(1)	MINAARE
Q	(1)	MIIYOO	~	(1)	MIRARE
R	(1)	MIIYA	ミ	(1)	MINA
/	(19)	MIYO				
!	(2)	MIYOYO				
I	(1)	MIYOO				

図14 「早く見ろ」

語を加え、それぞれの命令形の現われ方に焦点を当てて、その側面を考察することにした。

図14は、「早く見ろ」という命令表現における「見ろ」の部分のグロツトグラムである。

MIIが広く分布する。そして、南部の新宮市(A~C)あたりにはMIYO

の形が濃く分布している。MII の分布域のなかにも、特に年層の高いところでは、MIIYO の形が散見する。これは、MIYO と MII との接触によって生まれた混交形と考えられる。ただし、このなかには、MII に終助詞としての YO が付加したのものも含まれているようである。実際、MIYOYO のような形も存在する。

I)\$)\$	IL	/	I Z	ムロ	コセ
I	0	*	/	/	I Y	スエ	コシヨウ
I	●	●	/	+	I X	ノハラ	
I	I	0	II	X	I W	ウタ	
I	*	*	Z0	/	I V	シヨウト	ニシヨシノ
I	#	/	0	/OX	I U	タチカウト	
I	-	/	*	*	I T	サカモト	
I	*	*	*	/	I S	ツシトウ	オオトウ
I	*)0*	I	*	I R	ウイ	
I	/	Y*I	/0*	/0	I Q	ナカトノ	
I	*	/	0	00	I P	タニセ	ト
I	*0	/*	+	/0	I O	ウエノシ	
I	*	*	0	/	I N	タコツ	ツ
I	*-	X*-	/	-/	I M	カサヤ	
I	*	*I0	0	/	I L	オハラ	カ
I	*	/*	0	0/	I K	オリタチ	
I	*	/+	/	0<	I J	ヒラタニ	ワ
I	00	0	+	/	I I	ナナイロ	
I	0	0	0	0	I H	ハキ	
I	0	0	0	/	I G	ウエチ	ホンクウ
I	00	0	0	0	I F	ウケカ	
I	0	'	Q	/0	I E	ニシシキヤ	タマノカ
I	/	/	/	/	I D	ノキ	
I	∩	/	/	/!	I C	タカタ	
I	"	W	/	/	I B	カミホツマチ	シクウ
I	"	"	-	/	I A	オオシマチ	

10- 30- 50- 70- AGE
NO OF CASES = 104

-	(5)	OKIRO)	(3)	OKI
*	(25)	OKIRE	((1)	OKIIRAYO
+	(4)	OKIREYO	\$	(2)	OKIYA
#	(1)	OKIREE	l	(1)	OKIRANKAI
●	(2)	OKIRI	X	(3)	OKINKA
●	(1)	OKIRIYO	Z	(1)	OKINKAYO
●	(1)	OKIRII	Y	(1)	OKINKAA
0	(28)	OKII	W	(1)	OKINKAN
0	(8)	OKIIYO	/	(2)	OKINASAI
Q	(1)	OKIIYO0	'	(1)	OKINAYO
/	(35)	OKIYO	"	(3)	OKINAARE
!	(1)	OKIYOYO	∩	(1)	OKINAA
I	(6)	OKIYO0				
L	(1)	OKKIYO0				

図15 「早く起きる」

さて、中部域の十津川村以北、五条市以南（I～Y）では MIRE という形が現われ、年層が低くなるにつれて拡大している。そして、若年層では MIRE が圧倒的になっていることがわかる。これは、まさに「見る」を五段に活用させた、その命令形であり、先の図12における未然形 MIRA に対応するものである。

なお、注目したいのは、五条市（X）での若い年層に見られる MIRI の形である。これは五段活用としての連用形であろう。すなわち、これは「行く」における IKI や「聞く」における KIKI などに対応する、いわゆる連用形命令の形と考えられるのである。

ところで、一段動詞の五段活用化現象は、この地では規則的に起つたらしい。その傍証として、次に、「起きる」の場合を取り上げてみたい。

図15は、「早く起きろ」という命令表現における「起きろ」の部分のロットグラムである。

OKIYO と OKII の対立がある。両者は拮抗しているが、高年層には OKIYO の勢力が比較的強いようである。なお、中間形 OKIYO も散在する。

一方、年層が低くなるにしたがって、十津川村以北、五条市以南の地域（I～Y）に OKIRE の形が勢力を広げつつあることが認められる。これは上の図14での「見る」の場合とまさに同様の、「起きる」を五段に活用させた、その命令形である。そして、やはり、五条市（X）での壮年層と若年層においては、OKIRI の形が見られるのである。この形が連用形命令の形であることは、隣接する御所市（Z）において、高年層で、OKIYO、すなわち一段活用形が用いられていることに応じて、壮年層・若年層が、連用形命令 OKI の形を採っていることから確認することができる。

【付記】

本稿は、科学研究費（総合研究A）「関西方言の動態に関する社会言語学的研究」（代表・徳川宗賢）による成果の一部である。

参考文献

- 真田信治 1989『日本語のバリエーション—現代語・歴史・地理—』（アルク）
- 真田信治 1987「ことばの変化のダイナミズム—関西圏における neo-dialect について—」（『言語生活』429）
- 渋谷勝己 1986「打消・可能表現」（「和歌山県紀ノ川流域の言語調査報告」『日本学報』5）
- 金沢裕之 1988「打消表現」（「和歌山県中部域の言語動態に関する調査報告」『日本学報』7）

（さなだ しんじ 文学部助教授）